

## 【エディトリアル】

# 学術的成果と情報発信のツールとしての現状と未来

健康スポーツ科学科 紀要委員長 庄司直人

本誌「朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科紀要」は、2017年度に発刊され、今号が第5号となりました。本稿では第1号の巻頭言で竹島伸生学科長が示した言葉を3つ引用しながら、これまでとこれからの健康スポーツ科学科紀要について書き進めます。

まず一つ目は、「研究成果公表や情報発信のツールとして『健康スポーツ科学科紀要』が発刊された」ということです。本誌はこれまでに第4号まで発行されており、その内容を概観すべく、掲載原稿種別の内訳を表に示しました。今号も含めてこれまでの本誌掲載論文を概観すると、総説論文、原著論文、実践研究が11編（26.2%）掲載されており、一定の研究成果発出の役割を果たしているといえるでしょう。加えて、研究資料についても今後の研究の発展に資するものとして同じく11編（26.2%）が掲載されています。これらを合わせると全体の52.4%を占めています。そして、その他のスポーツ実践に関する報告や国際学会の報告、翻訳<sup>a</sup>を含む各種報告等が47.6%でした。この結果を見ると、研究成果の公表と情報発信のツールとしてバランスよく機能しているともいえるでしょう。

続いて二つ目は、「スポーツの世界で主観に頼った運動指導の問題点はいうまでもありませんが、実践が伴わないスポーツ理論の先行は絵に描いた餅と同じ価値のないものとなります」との言葉です。これは科学が細分化されてきた過程で人全体としてのパフォーマンスを捉えにくくなっているという矛盾に対する反省を踏まえての言葉です。これまでの本誌掲載論文は原著論文が約2割を占めており、科学として健康やスポーツに関するエビデンスの蓄積に貢献してきました。これはスポーツを科学するという面での貢献といえるでしょう。それに加えて、1編の実践研究が掲載されていることは、スポーツを実践の科学として捉えた場合の大きな貢献といえるでしょう。この1編はダンスの習得に関わる視線行動から上達を促す指導方法のヒントを得ようとする新しい試みを報告した論文です。やはりスポーツは科学の対象であると同時に、実践が欠かせない領域であり、実践の科学と捉えることができます。本誌もそこに注力する必要があることを表から読み取ることができます。

そして最後は、「本紀要は、従来の学術雑誌の画一した内容に捉われず、日々の教育研究の中から生まれた小さな課題であっても大胆に分析した結果や発想の提案などであっても良いと思われます」との言葉です。スポーツ指導の現場において一般化された知見が広く活用されることが重要であることはいうまでもありません。しかし一方では、プレーヤーは画一ではありませんし、現場ごとの個別性が非常に高いといえます。また、実践における一つの事例が完結するまでに多大な時間を要し、それらの中から多くの事例をまとめて

表 朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科紀要の掲載論文種別の内訳

年度(号)	各論文種別の件数(%)							掲載論文 総数
	総説	原著	実践研究	事例研究	アイデア	研究資料	その他	
2017(1)	1(14.3)	3(42.9)	0(0.0)	- (0.0)	- (0.0)	2(28.6)	1(14.3)	7
2018(2)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	- (0.0)	- (0.0)	4(66.7)	2(33.3)	6
2019(3)	0(0.0)	2(18.2)	1(9.1)	- (0.0)	- (0.0)	2(18.2)	6(54.5)	11
2020(4)	0(0.0)	1(8.3)	0(0.0)	- (0.0)	- (0.0)	3(25.0)	8(66.7)	12
2021(5)	1(16.7)	2(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(50.0)	6
計	2(4.8)	8(19.0)	1(2.4)	0(0.0)	0(0.0)	11(26.2)	20(47.6)	42

注 事例研究、アイデアは2021年度から新設された原稿種別。2019年度3号では1論文が実践研究として掲載された。

一般化された知見を発出することは決して容易ではありません。こうした背景から従来のスポーツ領域の学術誌では貴重な事例を集積することは、困難な面があるといわざるを得ません。ここで必要なことは、貴重なスポーツ現場の一事例を詳細に記録し報告する場があることです。本誌ではその貴重かつ希少な一事例の受け皿とするべく、事例研究を論文種別の一つとして設けることにいたしました。また、スポーツや健康に関する実践の場面や研究を推進する中で得た着想をもとにしたアイデアも論文種別の一つに加えました。これは先述の大胆な発想を社会に発信することにつながり、これまでの常識を覆すような革新的な方法論の構築には欠かせないことでしょう。

これからの本誌は、これまでと同様に研究成果と情報発信のバランスの取れたツールとして存在することに加え、日々行われている貴重な実践を報告する事例研究や、大胆な発想の発信が行われることを期待し規定等を含む環境の整備を推し進めていきます。また、学術誌にもオンライン・電子化の波が押し寄せています。その利点の一つに研究成果や貴重な情報をタイムリーに発信することができることを挙げるすることができます。こうした、研究成果の発信方法もまだまだ工夫の余地がありますので、今後の紀要委員会の課題として検討を続けます。それらの結果として、実践研究、事例研究、アイデアの掲載が増えることを期待し、その実現を見据えながら改善を続けていきます。

<sup>a</sup> 翻訳は学術的成果と位置付けられるが、作表の便宜上、その他に含められた。

#### 引用

竹島伸生(2018)保健医療学部健康スポーツ科学科紀要の発刊に寄せて. 朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科紀要, (1), 1-1.